

Title	日本動詞完了乃至過去形態の歴史に就いて
Sub Title	
Author	西脇, 順三郎(Nishiwaki, Junzaburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.67(239)- 94(266)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 日本動詞完了乃至過去形態の 歴史に就いて

## 序

(1) 日本動詞の定限の形に於ける過去乃至完了を表はす形態を歴史的に比較することは此處では暗示にすぎない。けれども先づ斯くの如き研究をなす爲めに過去を表はす形態が如何にして成立するかを考へなければならぬ。次に音論としての注意をする必要がある。

(2) 術語は諸々の外國語を統一なく使用することを許していただきたい。

(3) 動詞の root を語尾の變化と區別することを新に考へることにする。

(4) 音の原形を比較的暗示することが便利であるから *tsu* を *ts* と記述する。その他 *chi*( $\wedge$ tsi) を *ci* とし *pi* を *pi*(チ) とする。 *shi*( $\wedge$ si) を *si* として記述することにする。また *dzu* を *dz* とし、 *zhi* を *zi* とす。

(5) 先づ過去乃至完了形の形態が如何にして成立してゐるかそのメカニズムを乃至組織を、考へてみる。文法論から例を取る場合は金澤博士及び大槻博士を根據とする。

(6) 次に他の言語と比較して考へてみることにする。

(7) 次(4)の補足として一言する。「比較的暗示する」といつたことは、日本語の音の變化の特色を暗示するために便利であるといふ意味であつた。ㄆ及びㄇが「上母韻」ㄨとかㄨにつゞくときは affricatives になる。tu↘tsu また du↘dzu ti↘tsi↘chi(チ)di↘dzi↘dzi(ヂ)となる。si↘shi zi↘zhi となる。

また印刷の都合、正確な發音記號を使用せざりしことは許していただきたい。

次にㄆから來た(フ)の音は今日では bilabiales の音となつて Fu となつてゐても hu と記述することが正確であるが Fu と書くことにする。また bilabiales の F から來た Fe の音の場合があれば Fe と記述することが正當であるが he とする。今日では ha hi hu he ho ㄨ Fa Fi Fu Fe Fo とは混同されてゐるために語原が明かに研究されてゐない今日は是等の場合を識別して正確に記述することが不可能である。例へば「思へり」の(へ)の音は語原からみれば he であるか Fe であるか正確でない。

次に今日の發音では音がなくなつてゐる場合でも語原を多少でも暗示するために「思ひ」は omohi と記述することにする。

(8) 自分は元來日本語等を専門とするものでなく單に興味をもつ者にすぎないのであるから、此處に

述べることは廣く専門家の意見を尋ねたいために書くものである。

## I

(1) 動詞の root の種類に一次的なものゝ二次的なものがある。云はば *Wurzelstamm* と *Ableitungsstamm* とに分けることが出来る。此の現象はウラルアルタイ語などには特に表はれてゐるものである。

(2) 前者の root は所謂動詞の本體のもので、後者の root は所謂助動詞である。

日本動詞に關しては此の後者の roots を構成する對象の種類は

(1) 使役 (2) voice (3) 能力 (4) negation (5) tenses (6) moods 等である。

(3) root の變化と所謂 conjugation と稱する變化とは區別すべきである。日本動詞の語尾の變化と通常されてゐるものは root の變化でなす。

日本の所謂語尾の變化といふのは

(1) Finite Verb の形(終止形)

(2) Verbal adjective の形(又は形容詞的分詞)

(3) Verbal adverb の形(又は副詞的分詞)

(a) adverbial clause に當るもの(接續法)

(b) conjunctive clause (折說法)

(4) Imperative の形。

(5) Verbalnomen の形

(6) Infinitive の形(これは  $-\nu$  に終る。Mongol の  $-hu$  に當る。 $-\nu$  に終る infinitive は他の言語に多く表はれてゐる現象である。例へば Assyrian 語など。また此の形は Finite verb の形と大體一致する。けれども「アリ」の變化に關して、ari は終止形であるが Infinitive は aru である。

(4) Finite verb の形態

(1)  $-\nu$

(2)  $-\nu$

の兩者がある。 $-\nu$  に終るものは Verbalnomina の形であるとも考へらる。

(5) Participles は二大別して、形容詞的なもの即ち(形容詞の機能をもつもの)と及び副詞的なもの即ち(副詞の機能をもつもの)とがある。

(6) 形容詞的なものについて

(1)  $-\nu$  で終るものが大部分である。

(2)  $-\nu$  で終るものは beki, gotoki, maziki,

(7) 副詞的な participle (これは conjunctive gerund と  $-\nu$  人もある)について。  $-\nu$  は when の意味

が含まれてゐるもの

(1) 完了乃至過去を表はすものは Verbalnomen + aba である。

(a) —i + aba > eba

(b) —e + aba > eba

(c) —u + aba > aba (シカヅ、マシカヅ)

(d) —i 又は —e のみのもの。(—me ヌrasi である)。そして Verbalnomen のみ使用されてゐるものと考へらる。

(2) 未來乃至現在に關するもの —u + aba > aba

(8) 副詞的な Participle の中で —ba のなきもので、種々の副詞的文章の價値をもつものであつて、インドヨーロッパの用法と同じ。

(a) Verbalnomina の形である。

(b) 時間は過去、完了、未來、現在をも含む。

(9) ウラルアルタイ語族と Davidisch 語族に於ける Participle と Verbalnomina の研究の一般は Misteli の Charakteristik に面白く書してある。

(10) —aba, —eba はアイヌ語の awa に同語原と思はれる。

(II) Imperative の形。

〔1〕 -e!

〔2〕 -eyo!

(12) Verbalnomen の形態

〔1〕 -i

〔2〕 -e

に終る。この形態は conjunctive 形と一致する。例としては恐らく beku, gotoku, maziku

## II

(1) Finite verbs の過去乃至過了の形態と形式は次の如きメカニズムによつて組織されてゐる

(一) Verbal noun(動詞から來た名詞)+tu

(二) 同 +(tu+ari=tari)

(三) 同 +nu

(四) 同 +(ki ari=keri)

(五) 同 +ari(此の場合は動詞的名詞の語尾の變化 *i* と *ari* との結合即ち *iar*i > *eri* となる。この變

化は他の例をよれば *meri* > *mi*+*ari* *keri* > *ki*+*ari*)

(六) 同 十

以上の六つの場合は原則を示すにすぎなく、尙、複合的にまだ Verbal nouns に聯結するものが存在する場合があるけれども、組織は Verbal noun + 動詞現在であることを説明せんとするものであるから、その主たる場合を例としてあげたものである。

日本語の過去又は完了の主たる形態は名詞から出来てゐることは明かである。

(2) 日本語の Verbal nouns(乃至大槻博士の文法では gerund としふ名稱も使用されてゐる)の形態は

(1) root+i

(二) root+e

である。第(二)の場合は大槻文法の分類によれば、「規則動詞第二類」に屬する動詞の名詞のみである。

其の他は皆一にて終る。

(3) 第(一)にあげた形式 Verbal Noun+tu に關してtuの如何なるものであるかは此處の問題ではないが、然し、若しそれを動詞としての假定を許されるならば「いづ」(出)と同語源ではないかと思はれる。助動詞「つ」の變化の形態の種類は「いづ」と一致するものでもある。

(4) 第(三)にあげた形式 Verbal Noun + nu の nu は「いぬ」(往)である。これは一般に認めらるゝものである。變化の種類も「いぬ」も「ぬ」も同じ。略した形である。



(5) 第(四)にあげた形式 Verbal Noun + (ki + ari = keru) の keru は「來<sup>キ</sup>アリ」といふ語原は一般に認められてゐる。ki 自身も Verbal noun であるとするれば、この場合の形式は verbal noun + verbal noun + 現在終止形動詞 ari である。

(6) 第(五)の形式は verbal noun + ari であるが、この場合は規則動詞第一變化の分類に屬するもののみが正當に使用されることになつてゐる。

verbal noun の最後の i と ari 即ち iari = eri に音の變化をなしたものとす。結局は root i + ari が root + eri となつたものである。例、onohi + ari > omoheri

助動詞「せり」は「す」爲の verbal noun si + ari = seri となつたものとして、第五の形式として説明が出来る。

また「けり」といふ助動詞の「來アリ」といふ説は權威あるものであるが、「ゆけり」の略とも考へらる。即ち yuki + ari から「ゆけり」となつて、それが「けり」に略されたものであるとも考へらる。この場合の形式は root i + yuki + ari で略としては root i + ki + ari であると想像し得る。

(7) 第(六)は Root i + ki この關係に於ては、root i + si といふ形容形がある。

(8) 以上、過去乃至完了形の組織を考へてみたが本文としては、其の組織を他の言語と比較することが目的であつた。其の形式の發達の歴史を決定することが出来ないが、しかし單に比較することに止め

て、將來の研究に對する暗示を得るために多少の便利があるかと思ふにすぎない。

(9) 日本語の種族を決定するに、議論や理論に關して非常に各々の學者は異なる。言語の現象は心理の現象であるから、偶然に相似なる傾向が表はれることがあるので、言語の系統の歴史を研究する場合、困難をみるどころである。

例へば、日本語の動詞の組織に關する限り、少くともコーカサス語系に類似である事實がある。

けれども此の現象は直接の關係として考ふべきものか、ウラルアルタイ語系とコーカサス語系との關係から間接に日本に關係を見出すべきものかは、決定が出来ない。またコーカサス語系と南方アジア語系との關係に於て考ふべきものか、また問題となる。

(10) いまトロンベチの分類の術語を用ひて、其等の關係の位置をあげれば

Indoeuropeo

Uralaltaico

Caucasico

Dravidico-Australiano

Bantu-Sudanese Munda-Polinesiac

Camitosemitico Indocinese

Paleoasiatico-Americano

日本動詞完了乃至過去形態の歴史に就いて (西脇)

である。是等のアジアを中心として、南北の二派に分割したときに、日本語はいづれに屬すべきものか、學者に二派が分かるゝやうである。

(11) 是等の多くの言語に關して、動詞の組織の形式の一つに代名詞を表はす語尾がある。日本語には今日の文法學乃至言語研究者の考へるところとしては未だ、斯くの如きものを發見されてゐないやうである。この現象は日本語には元來なかつたものか、それとも未だ研究が足りないのであるか、よくわからないのである。

### III

(1) 日本動詞の過去乃至完了を表はす形態は、*verbal noun* を中心として構成されてゐることは明らかである。

完了形を表はす主たる部分が *-* 又は *o* で終ることは世界の語系、例へばウラルアルタイ語系、インドヨーロッパ語、バントウ語、南方アジア語等、殆んどあらゆる方面に表はれてゐる現象である。

參考 ≡ Trombetti = *Elementi di Glottologia* (§§ 864-872) 及び Dr. Josef Szinyei: *Finnisch = ugrische Sprachwissenschaft* (中の *Verbum* の *Präteritum* に關する部分)

(2) *Verbalnomensuffix* が *-* 又は *o* に終つてゐるものが世界に非常に多い。ひとり日本語のみでない。近い例ではアイヌ語で *itak* が *itaki* となる如し。フィンシ・ウグリシ系も然り。

(3) 完了形が「又は」で終る。これは Verbalnomen でない語もあるであらうが少くともウラルアルタイ語族ではさうである。

(4) 日本語の動詞で同一の語根で自動と他動のある場合は自動の方は「で終り、他動乃至受身の方は「で終るものらしい」。

tati: tate; yaki: yake muki: muke なづがある。又アイヌ語にて、rai: raige; hachiri: hachire(Trombetti § 851—参考。)

(5) 所謂 Nomen Actoris は「又は」で終る。即ち Verbalnomen である。inu-zini な yuki-furi なか budo-dzukuri なづである。また Finnico では laula-ja なか、フィン語で fisk-ja, Magiaro 語では tolvaj 等がある。

参考 = Trombetti 同書 §§ 860-863。

(6) 完了又は過去形の諸例を重に Trombetti の同書からあげる。

1 Cafro: ndi bone in-komo (私は牛を見た)

Subiya: u zaki-te; u endi

2 Tonga: fui-de

3 Pul: mi wari

4 Somali: diga > diga-i 或は dig-ta-i

- 6 Thusch : Thege > theqi
- " : iti > itir
- 7 Estruco : pres.-a > pret.-e.
- 8 Ceceno : bāxa-r > impf bexin
- " > aor: bēxir
- 9 Tamil : ākki-nu
- 10 Telugu : pampi-tu 𑖧𑖫𑖳 pampi-nu
- 11 Kanawari : long-i
- 12 Manciatl : lha-i-ga
- 13 Cuman : hu-are-i
- 14 Maya : nak-i 𑖧𑖫𑖳 kim-i
- 15 Finn : asu > asu-i-t (du wohntest)
- 16 Malay : sahya sudah pergi
- 17 Héteen : pa-a-i > pi-eš-kir (impf)
- " > pi-eš-š'i-it (perf)

(7) Verbalnomina の現象に關するウラルアルタイ語の研究は、更に Misteli: Charakteristik der Hautsächlichsten Typen des Sprachbaues を参考すると便利である。

#### IV

(1) Verbalnomina に附してゐる Verbal suffix 先づ前節に於て大體今日の文法學者の權威によつて考へたのであつたが、是等の接尾詞を他の言語に就いて比較する仕事を企てゝみる。

此の種の Verbal suffix の形態を有する他の多くの語では、人稱を表はすものが附く場合があつて動詞が附くことがない場合がある。

此の種の Personalsuffixe は Possessive suffixe と同等な價值があるを考へることも出来る。

例 syriänisch や ker-(machen)

は過去では ker-in (du machtest) であるが、結局「汝の作り」といふことに説明することも出来る。

例 Iha-i-ga ば (I have done) — Manciatì

ra-i-na ば (Thou gavest) — "

(2) Malay 語の sudah pergi の sudah は副詞の如きものであるを考へられてゐる。

(3) Personalsuffix のみなんば demonstrative 又は冠詞が附く場合も想像が出来る。

## 例 Dravidian 語族中

suvāmi vand-adu (le seigneur est venu) 即ち動詞に中性の demonstrative "adu"

が附いた場合——Les Langues du Monde, p. 357.

(4) 日本語の Verbalnomen に附くところの助動詞の歴史を考へる場合三つの假定を考へることが出来る。

(1) 助動詞説。これは今日の文法學者の權威として動かすことが出来ない動詞説である。

(2) Personal suffix 乃至 demonstrative suffix 又はその他の要素であると考へる説。これは全くまだ證明の出来ない假説。しかし日本語に關聯すると想像し得る他の言語系から假定したものに過ぎない。即ち助動詞でないと考へる説。

(3) 動詞及び代名詞及びその他の要素とが共に用ひられたものと假定する説もあり得る。

けれども勿論、歴史時代になつてから即ち文献存在時代になつて、すでに、第(2)の場合は最早やなかつたものであることは明かである。Personalsuffixe の混同乃至消滅の時代で、若し歴史的には Personalsuffixe であつたものでもそれが全然忘却されたものと假定することが第(2)の假説である。

第(3)の假説は歴史的には Personalsuffixe と動詞とが併用されてゐたものが Personalsuffixe が忘却されて、動詞の意味のみが保存されたと假定するのである。

(5) 日本完了乃至過去の suffix の要素に、*た*, *ち*, *け* 及び *-ar-* がある。是等の particles に関して他の言語との比較を考へてみる。

(6) この事に先立ちて、先づ Verbalnomina の語尾 *い* 又は *え* 如何なるものであつたか、考へてみる。  
(I) *い* は *wi* でないかと思はれる。而して *wi* は *bi* であつたかと思ふ。*w* と *b* の關係は *w* は *b* が fricative になつたものにすぎない。即ち *ち* の音である。

mongol 語の *baihu* (これは Sanskrit *bhū* に關係がなしか)。また *bolhu* は *wir* (キル) なりに當ることも考ふる。また、David. 語中 *iru* などもある。Teutonic の *wesan* にも當る。

(II) *え* はよく知ることが出来ないが、*ia* か *ai* などから來たか *ga*, *ge*, *ya*, *ye* などが附いたものが發達したかとも考へらる。しかし、皆想像にすぎない。

(7) Personalsuffix が動詞の語尾に要素となつて明かに残つてゐるものは Finnisch-ugrisch & Dravidico & Indocinese などもあるが Mongol 語 & Ainu 語には日本語と同じく明かでない。

註(6)の(I)にある *bi* はツングス及滿洲語中には (to be) の意味。Bantu 語中 *ba* も亦 (to be) である。

(8) 動詞の suffixe は一般に *ス* と *シ* Personal suffixe の他に所謂 *abgeleitete Verba* を表はす記號がある。例へば *frequentative*, *momentane*, *Kausative*, *Reflexive*, *Passive* などの冠詞 & demonstrative & 名詞から



來た動詞や negation & Modi & Tempora を表はす suffixe がある。是等が複雑に接尾語の要素になつてゐる。單に動詞が助動詞として附く場合は、日本語、アイヌ、蒙古語などは比較的簡單なものである。

日本語な<sup>ん</sup>は Kausative, negative, passive な<sup>ん</sup>は動詞の suffixe を構成する。

(1) Kausative な<sup>ん</sup>は

(a) root-i+sass

(b) root-e+sass

(c) root-O+sass

(d) rooe+Ass

(2) passive な<sup>ん</sup>は

(a) root-i+raru

(b) root-e+raru

(c) root-O+raru

(d) root+Arū

(3) negative な<sup>ん</sup>は

root+az, ez, iz, oz.

(6) 比較の例として。Causative としては

(a) Finn-Ug. には  $\text{-t}$  及び  $\text{-i}$  がある。これは日本の他動詞に附く  $\text{-tu}$  と関係があると思ふ。

Trombetti 同書 §§ 906-910

(b) Kausativ 乃至他動にする場合、Ainu では (1)- $\text{te}$  (2)- $\text{de}$  (3)- $\text{re}$  (4)- $\text{ka}$  (5)- $\text{ge}$  を附す。

(c)  $\text{-k}$  の場合は Trombetti 書 §§ 895-896 参考。

(d)  $\text{-s}$  の場合は同書 §§ 900-903 参考。例 Temne 語中  $\text{dira} \rightarrow \text{dir-as}$  (addormentare) Chamir 中  $\text{akeb-s}$  Semitico 中には  $\text{-s}$  又は  $\text{sh}$  がある。

(10) 日本  $\text{nas}$  (なす) は  $\text{na-s}$  から來た (cause to be) としふ意味であるとも説明が出来る。アイヌ語の過去を表はす  $\text{suffix-nisa}$  は日本語の  $\text{nas}$  に當るものであると思はる。

(11) 日本語の  $\text{root-i+tu}$  の形は過去乃至完了は reflexive か Causative の suffix であつたのかも知れない。その證明の一つに  $\text{-tu}$  は他動詞に多く使用されるものと考えられてゐることである

(12)  $\text{-Z}$  の suffix に就して。他に  $\text{-N}$  の形もある。

(1) Tulu 語中  $\text{mal-pu-dži}$  (io non faccio) にて  $\text{iddži}$  は一例となる。また Finn-Ug. 中にも  $\text{ezin ramak}$   $\text{ezit ramak}$

(2)  $\text{-N}$  の系統は非常に多し。

(3) a 又は a の形は Dravidico にある

例 Kott-A-N.

(4) -il の形は Dravidico にもある。Misteli の書 9,9 参考。

(5) Mongol. は gëe アイヌは shomo, seenne, 或は shomoki

(13) Passive 形に關して。

(1) アイヌは動詞の前に A-, A-en, e,echi, A-un, なづを附す。それに an, ruwe ne, nisa 等を附す。

(2) Finno-Ug. は -V なづが suffix となる。

(3) Mongol には da 又は de, Ida, Ide なづもある。

(4) -aru なづと動詞が日本語の形式であるが アイヌ等の形式(to be)が附くものと同様のものであると思ふ。

## A

(1) Verbalsuffix -n- に就いて root-i+nu の形態の -nu の歴史は他の言語と比較するに (1) Personal-suffix の場合と (2) 他の particle の場合とが大體分けらる。前者は、例、Finn. 語にて eli-n(ich lebte); syrij' ker-i-n. (du machtest)

(2) Ainu 語中

(a) ne は (to be)

(b) an は (to be) 又は There is

(c) na は終結を表はす語であつて perfect 形に使用されてゐる。例 Moruran orowa ku ek na (I have come from Muroan)

(d) -nisa は過去を表はす suffix であるが、その *na* も何にか関係があるとも考へらる。

(e) ine 例 'ek ine ne (he has come?)

(3) Mongol. にて nam, nem, nom, *na*, *ne*, *no* がある。是等は現在に附してゐる suffix *na* であるが、何にか関係があるとする事が出来る。矢張りアイヌ語の *na* に當り、to be の意味があつたものと考へらる。しかし *-sen* と *su* 形があるが「なしぬ」または「しぬ」に當るもの。

(4) インドネーション語中 *ni*, *no*, *nu*, *in* がある。

例 (Langues du Monde *な* *し* *ぬ*)

Formose : lummis > l-in-Ummis

Talut : umire > in-umire

Nias : mofano > no-mofano

Merina : tunena > nu-tunena

(5) Thusch 語中

例 dag-i-no (veduto)

(6) Bantu 語中-e-ne 完了語尾がある。

(7) *u* は分詞になることが

例 Mongol. baisan (Having been) Thush 中 daqu-in

Slavo 中 vez-e-nu (gefaren) nes-e-nu (portato)。

Got. fulgi-na.

(8) 自動詞に就くことは Finnic にもある。(tu は他動詞で nu は自動詞につくといふ日本文法學者の説はウラル語中にもあることになる)。

例 page-ne (fugere)

(9) 日本語の nu はアイヌ語などの (to be) の意味か。

(10) (3) の補足として lie-ne の例がある。

## VI

(1) *u* に關するもの。此の語源も困難なものであるが、動詞として考へることが出来るか。序文で私の想像を書いた動詞としての考は勿論助動詞説としてみる場合の想像であつた。

要するに *+*といふ音は過去または完了に使用され得ることは世界の言語に多く表はれてゐることである。

(2) *+*は *-p*になることがある。Telugu の *pampi-tu* や Can. の *mādi-du* など参照。

(3) Mongol. 中

(1) *-at,-et,-ot* は perfect gerund

(2) *-tak, -tek* は perfect participle

(3) *-tal, tel* も完了にも関係があるか(2)

(4) アイヌ語中 *Or* は *O*(to be) の複數になる。また *tu ogami ki ruwe ne.* などの *tu* などの副詞は關係がない。*ta, te* などがあがるが皆副詞である。あまり完了過去を表はす語として *+*がないやうである。*+*は他動詞に使用されてゐる。

(5) 朝鮮語中

例 *pota* > *poatta*

(6) *+*が causative suffix となる例は Trombetti S S 906-910 参考。

(7) インドゲルマン語系では、例へばラテン語の受身完了形としての participle がある。

(8) Greenland 語の過去形に *+*がある。

- (6) Dravidisch 語中の中性過去冠詞 *maditu* (es machte) - Mistelli 書頁 400
- (9) Maori 中單數冠詞 *ti* の suffix
- (11) Elamite の完了形 *-ti, -ta,*
- (12) Hétién の aoriste, 3e pers. sg. *-it*
- (13) Dravidisch 語族中
- (1) sey-d-an (il a fait) *nya* Mongol. の *-Sen* をか日本語の「ナシヌ」等に當るか。
- (2) *iru* (to be) の perfect participle *idda*
- (3) *agu* の perf parti. *āda*
- (4) *adu, idu* が demonstrativesuffix.
- (14) ウラルアルタイ系 の jakutisch の perfect parti の *but, büt, bit, bit*
- (15) Magyarisch 中 *látott* (Verbalnomina *ly* gesehen habend, hat gesehen, etc)。
- (16) Malajo-dajackisch 語中 Demonstrativa *itu* が *ある*。(6)を參照。
- (17) Caucasic 中 *tan-etta*

## VII

- (1) *ホ* 又は *ホ* に關して動詞説は「來アリ」を説明する。

キの音は世界の諸方の言語にも表はれてゐる現象である。

(2) アイヌ語中

(1) iki (to do)より Verbalnomina は ki-i

(2) ki は iki の略を考へらる。そして過去の suffixe に使用せる。例 Tu Ogamī ruwe ne また略  
ちれぬ形をこつた Nen ta iki ruwe ne (who did it?)

(3) kara (to do)

(4) okere (to finish) 完了形の suffix 此の Verbalnomina は Okere-i 日本語の「ケリ」は此れを同一  
の語系であるとも考へらる。

(3) 満洲語 -ka, -ke, -ko または Xa, -Xe, -Xo は perfect participle の suffix となる。

(4) Washo の Costano 語中 -ki は過去の suffix である。

(5) Héteén 語中過去形 -ki-ir

(6) andamani 中 d-a-mamika (I Was sleeping)

(7) Mundari 語中の過去の suffix

(1) -keda (他動詞につく)

(2) -ke-na (自動詞につく)



- (8) 其の他の場合は Trombetti 書 il suffisso k temporale の章參考。
- (9) marajo-dajackisch 中 ada だ(sein)
- (10) Dravidisch 語中 agu (sein werden) の聲。その perfect gerund は āgi
- (11) Dravidico-Australiano 語族中の gir (essere, vivere) 日本語の(生)イキルなどに當るものか、或は「キル」などに當るものか。
- (12) Mongol. の perfect suffix ズン

(1) -ga, -ge

(2) -ye (baiye)

(3) -cha, -che

(2) と (3) は -ga, -ge の音の變化を考へらる。

(13) アイヌの rai-ge (chep raige he killed a fish) などは Mongol. に類似なものである。

### VIII

(1) ar 又は eri に關して。例へば sak-eri は序文で saki+ari から來たと考へた。

ar と i とが混同されてゐる。意味は (to be) ズ (to live) とがあるが、是等を識別することが困難な場合がある。

(2) *アイヌ* にて「*アン*」の意味は *an* *ka* *ne* *ka* で表はすが音の相似なものをあげれば

- (1) *oro* (to be in) (2) *orage, orake* (is not) (3) *araki, ariki* (*ek* の複數) (4) *arupa, arapa* (to go)  
(5) *are* (to put) (6) *ari* (having = gerund) (7) *ara, yara* (imperative)

日本語の *-ar, -ei* の五權に同一のものが suffix となる。

(8) Fin. *olm* (impf. 1st pers. Sg); Olen *ollt* (perf. 1st pers. sg)

(4) jakutisch の durative *ar, är, or. ör* 等。

(5) andamani 中 *d-a-mani-re* (I slempt)

(9) Dravidian 中

(1) *-alu* (infinitiveform)

(2) *-ali* (imperative form) *アム* *アム* 語の imperative *ara* *am* に類するものか。

(3) *iru* (to be)

(4) *elö* (living)

(5) *högi iralu* (to have gone)

(6) *a da-re* (to have been)

(7) Mongol. *ア*

- (1) -la, -le (perfect suffix) (5) 参考。  
 (2) -tal, -tel  
 (3) -lar, ler, lor (perfect gerund suffix) = ada-re 参考。  
 (4) sar, ser, sor ( 同 ) = [sar] ?  
 (5) mar, mer, mor, (ᄎᄎᄎ)。  
 (8) Bantu 語の ndi-bon-ile (Misteli 書頁 328)

## IX

(1) -s に關するもの。これに關するものは「きし、しかば」の場合と、「なす」とか「する」とか「とす」と動詞の場合である。

- (2) アイヌ語中 -nisa は過去を表はす suffix  
 (3) Mongol. 中  
 (1) ass, oss, oss (participle)  
 (2) -ss (gerund)  
 (3) -bass, bess (concession を表はす時の gerund)  
 (4) Caucasic 中

- (1) tan-oša (pret.)
- (2) tana-šta (aor.)
- (3) Finno-oug. の Preterite 語根的 suffix の  $t$  に  $s$  又は  $z$  がある (Szinnyei 博士の Finnisch = ugarische Sprachwissenschaft の頁 123-124 参考)
- (4) Canitico 語族中  $-i-si$  (aor.)
- (5) 朝鮮語  $poo \succ poaso$
- (6) Mongol. baise
- (7) Élanite aoriste 3p. sg.  $-š$
- (8) Héteén. pret.  $-š -ki -ir$

X

- (1)  $-b$ . 又は  $-w$  に就する。  $b$  と  $w$  とは plosive fricative との関係であるから音の變化したものと考へらる。例へば日本語の  $mi$  と満洲の  $bi$  とは同じものであると考へる。
- (2) Mongol.  $-ba, -be$  は perfect suffix または bass bess 等。
- (3) ハンタ語  $-awa$  (perfect gerund) 日本の  $aba, eba$ , 等に當るものか。
- (4) Jakutisch の  $-but, büt, bit, bit$  等は perfect Verbal noun である。

## XI

以上、完了と過去に關する形態を他の言語と比較してみたが、この特種の一つの場合によつて日本語はいづれの語族に最も相似なものであるかを此處で考究するのではない。けれども私見としては、日本語はアイヌ語に似てゐる重要な點があることを注意したい。日本語とアイヌ語とは相互の影響があつたことと、及び若し初め同一の語族に屬してたとしても、それは別々に發達して來てゐることは確實である。アイヌ語は今日の或る説はアルタイ語系に入れない。けれども私見としてはウラルアルタイ系により近いものであると考へらる。

ウラルアルタイ系は勿論南方アジャに廣つてゐる諸々の語に密接な關係があることは明かである。日本語が北方アジャと南方アジャ語族に同時に類似してゐる現象を呈してゐる。しかしどちらに元來は屬すべきものであると考察するには、あらゆる東洋語の出來る丈け多くの實證と、及びその文法上の重要な類似點の統計上の研究が必要である。單に *vocabulaire* の研究のみでは不完全である。勿論 *vocabulaire* も非常に大切なものであることは明かであるが、語系の研究は語の文法上の組織を第一にその對象となるべきであると思ふ。

此處では主として、日本動詞の完了乃至過去の形態の語尾 *よ* *よ* *よ* 等の説明に本動詞の單に略された形としてのみみることが再考すべきであると暗示するためであつた。